

75 誌上発表

『診家枢要』について

宮川 隆弘

日本鍼灸研究会

『診家枢要』は、滑寿（1304～1386年）が著わした脈診に関してまとめた書籍である。その伝承について検討すると、薛生白主編『中国中医古籍総目』によれば、『診家枢要』の最も古い版本は中国中医科学図書館所蔵の明・弘治17（1504）年の古絳韓刻本で、明・万曆新安吳勉学校刻本がこれに次ぐ。しかし、その後、清末の光緒24（1898）年周学海刻本が出るまで、本書自体が中国で単独で重刊されることはなかったようである。この重刊本と1891年～1911年に出た『周氏医学叢書』第59冊に「周澂之評注医書」の一書として周学海の注釈付きで収められている『診家枢要』との関係は未詳であるが、末尾に「診家枢要附録」を附し、程文囿『医述』諸脈条弁、李士材『診家正眼』持脈総論を引いて注解している。その後も、現代に至るまで様々な影印本版や底本とした活字本の重刊が刊行されている。

本書の重刊本は僅かであるが、明代以降、叢書や医書の一部に本書の全文が引かれる例は少なくない。例えば明代の医書では、嘉靖（1529）8年序刊、滑寿著、丁瓚補正『素問鈔補正』十二巻の附編として序文と全文が見られる（CADAL公開本による。国立公文書館内閣文庫所蔵は後印でかつ附篇を欠く）。また隆慶3（1569）年刊行の何一陽『医学統宗』にも「医学統宗附滑氏診家枢要」として序文と全文が見られる。万曆40（1612）年刊行の『黄帝素問鈔』七巻（国立公文書館内閣文庫所蔵300函153号）は、先行する汪機注『読素問鈔』三巻補遺一巻の書名と巻数を変え、元来は補遺にあたる巻之七部分に『診家枢要』をあてたものである。以上の3本はいずれも著者名を欠く。天啓2（1622）年序刊の皇甫中著、王肯堂補訂の『補訂明医指掌』には、巻一の前に「訂補明医指掌附刻診家枢要」と題して全文が見られる。清代には、雍正6（1728）年陳夢雷等編纂『古今圖書集成』芸術典巻九十九・医部彙考七十九に全文が引用されている。

『診家枢要』の一部を引用した医書も少なくない。嘉靖15（1536）年刊行の方広著『丹溪心法附余』には、書名を挙げて引用が見られる。また嘉靖30（1551）年序刊の薛己注『明医雜著』巻三では「附滑寿先生診家枢要」と題して、冒頭から「脈陰陽脈類成」までが引用されている。嘉靖35年（1556）年序刊の賀岳著『医経大旨』にも巻四・脈賦の附編として部分的な引用が見られる。

日本には江戸期に上村次郎右衛門開版の刊行年未詳の整版がある。これには冒頭に中国の刊本には見られない陳贄の序文が附され、次に元・至正19（1359）年の滑寿の「櫻寧生自序」が続く。冒頭の書題その他、この和刻本と中国の刊本との間には細かな違いが散見するが、その詳細は省略する。本文の後には、朱右著「櫻寧正伝」があり、滑寿の経歴が詳細である。これは、明・李濂の『医史』と同一の内容である。更に7種の跋文がある。和刻本にはこのほか、元文6（1741）年京都西村市郎右衛門刊本がある。

近代以降も現代まで様々な影印本や底本とした活字本の重刊がある。近年では、平成7（1995）年に豊田白詩注解本が刊行されている。『診家枢要』は、滑寿の他の著作『難経本義』『十四経發揮』と並んで後代に大きな影響を及ぼした一書である。